

2009年北太平洋溯河性魚類委員会年次会議の概要

ながさわ とおる
永沢 亨（さけますセンター さけます研究部）

北太平洋溯河性魚類委員会（NPAFC）は1993年に発効した「北太平洋における溯河性魚類の系群の保存のための条約」により設立され、カナダ、日本、韓国、ロシア及び米国の5カ国が加盟している。2009年11月2日より6日まで、新潟コンベンションセンターにおいて第17回NPAFC年次会議が開催された。日本からは、岡本純一郎北海道大学教授及び坂本水産庁国際課総括の政府代表の他、開催国と言うこともあって総勢40名が参加した。本会議に加え、科学調査統計小委員会（CSRS）、取締小委員会（ENFO）と財政運営小委員会（F&A）が開かれた。CSRSには、カナダ6名、日本22名、韓国5名、ロシア12名、米国18名、オブザーバー3名が参加した。ここでは筆者の出席したCSRSの討議概要を紹介する。

資源動向と放流数

各国が提出したさけます統計データによると、2008年における太平洋さけます類の漁獲量は約77万トンで100万トンを越えていた2007年に比較すると大きく減少した。この減少は主にカラフトマスの豊漁年／不漁年の関係によるもので、他の魚種での漁獲量減は明瞭ではない。ベニザケ、カラフトマス、サケの主要3種で漁獲量全体の96%を占めており、全体としては高水準を継続している。アラスカでは予測を上回る漁獲であったのに対し、カナダでは記録上最低の漁獲となり、地域による好不漁の差が大きくなりつつある。また、2009年の漁獲量についても若干の意見交換がなされたが、ロシアでのカラフトマス漁獲量が42万トンを越えており、2009年のさけます類全体の漁獲量も史上最高値を更新する見込みであることが話題となった。

2008年の北太平洋におけるさけます類の総放流数は51億2千万尾で前年（50億4千万尾）よりも若干増加した。このうち日本からの放流数はほぼ一定となっており20億尾である（詳細については30頁の統計データを参照）。

科学ドキュメントの検討

科学ドキュメント合計43編が各国より提出され、主要な論文についてプレゼンテーションと質疑応答が行われた。昨年度にBASISのシンポジウムが行われた関係もあり、新規性の高いドキュメントは少なかったが、話題は気候変動とさけます類の資源変動がどう関わっているか？地球温暖化がさけますの資源にどのような影響を与えているのか？という点に集中していた。各国から



図1. 会場となった朱鷺メッセ:新潟コンベンションセンター。



図2. 年次会議本会議。



図3. 科学調査統計小委員会（CSRS）。



図4. CSRSに参加した筆者ら日本側研究者。

提出された科学ドキュメントやNPAFC出版物は、NPAFC のホームページ (<http://www.npafc.org/>) で閲覧やダウンロードできる。

作業部会

科学調査統計小委員会 (CSRS) には、個別の議論を深めるために科学委員会 (SSC) の他に、資源評価作業部会、さけます標識作業部会 (主に耳石温度標識の調整管理を担当)、系群識別臨時作業部会、BASIS (ベーリング海・アリューシャンさけます国際共同調査) 作業部会、さけます外部標識作業部会 (主に公海域での標識放流の調整を担当) の5つの作業部会が存在している。これら作業部会でのトピックをいくつか取り上げてみよう。

現在、科学委員会には2011~2015年のNPAFC新科学計画作成に関する議論を行い、次回(2010年)年次会議において計画を提出するという任務が課せられている。次回、2010年春に開催される調査調整会議ではこの新科学計画作成が主要議題となる。

BASIS 作業部会では2008年に行われたシンポジウムのプロシーディングについて紹介された。発表内容は査読手続きを経て現在NPAFC Bull No5として33編の論文として掲載されている。冊子でも配布予定だが、電子版は既にNPAFCのサイトで閲覧可能で、PDFファイルもダウンロードできる (http://www.npafc.org/new/pub_bulletin5.html)。

最終日の本会議では、さけます外部標識作業部会により共同調査による標識魚の再捕報告に対する謝礼のくじ引きが行われた。これは、標識魚の再捕報告率の向上を目指し、NPAFC タグを付けて沖合域で放流したさけます標識魚の再捕報告者の中から抽選で賞を出そうというシステムである。抽選の結果、1等は日本の北海道の漁業組合が、2等はロシア漁業者が、3等はアメリカ合衆国の漁業者が獲得した。

出前授業

年次会議終了後、来日した米国・NOAA の Edward V. Farley, Jr.博士と日本海区水産研究所調査普及課の北口裕一係長をメイン講師として11月6日に新潟市立松浜小学校において5年生を対象としたさけについての出前授業が行われた。この小学校は総合学習の一環としてさけについて学習していることからこの運びとなった。児童の代表からも学習成果の一端をまとめた発表もあったが、日本系サケが遠くベーリング海やアラスカ湾まで回遊することなどをしっかり学んでいたこと



図5. CSRSの議長を務めた石田東北水研所長と浦和事務局次長。



図6. TAG 標識再捕者への賞金当選者の抽選。4才の男の子がくじを引いて当選番号を読み上げた。



図7. 出前授業の講演を聞き質問する児童。

が印象的であった。Ed. Farleyさんの発表は彼がなぜさけます研究者の道を目指したか?を含む発表で、講演後はたくさんの質問が寄せられた。中には講師がたじたじの質問もあり、将来この出前講義受講者の中からさけます研究を背負って立つ人物が出てくるのでは?などと想像がふくらんだ内容だった。